－所蔵作品紹介－

舟越　桂　FUNAKOSHI Katsura

午後にはガンター・グローヴにいる

ごごにはがんたー・ぐろーう゛にいる

作品データはこちら

この作品には、モデルがいて、木による等身大の肖像彫刻といえるものである。実際、モデルによく似ているのだが、モデルの男性の存在感や個性の表出といった要素は稀薄で、作品のもつ一種のニュートラルな雰囲気にひきつけられる。木彫であるが、量感や木肌の表現は抑えられ、彩色されている。それでいて、木を素材としたことからくる親密さや柔軟さをよく感じとることができる。

舟越桂の作品を着衣の具象彫刻という視点から見るならば、佐藤忠良や父の舟越保武などの延長上に彼の作品をおくことも可能で、特に作品に漂う静かな詩情は父親からの影響といえよう。ただ、それだけではとらえきれない多面的、現代的な特色を彼の作品がもっていることは明らかである。例えばポップアート、スーパーリアリズムなどから作者が摂取し、消化したコンテンポラリーな要素が生かされている。そして現代社会や現代人がもつ共通の特色や時代性をその作品が端的に、中庸に、しかも分かりやすく表現しているといえるのではないだろうか。

舟越桂は1951（昭和26）年、岩手県盛岡市に生まれ、1977（昭和52）年、東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻を修了した。その活動は1980年代に入って次第に注目され、第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ（1988）、第20回サンパウロ・ビエンナーレ（1989）、カッセル・ドクメンタ（1992）など内外の美術展に出品、国際的にも評価を高めた。そのほとんどの作品はクスノキにアクリル絵具で彩色したもので、目の部分には大理石が使われている。半身像が多いことも彼の特色であるが、数体の全身像も手がけており、この「午後にはガンター・グローヴにいる」は彼の初めての全身像である。遠くを見つめるようなまなざしをもち、周囲の空間を取り込んで穏やかにたたずむこの作品は、一種の神秘さと詩的な雰囲気をたたえ、かつ適度に現代的である。

旭川美術館だより「氷華」No.32（1993.10発行）「収蔵作品から」より